

社会学概念による京都論

小川賢治

はじめに

本稿は、社会学の概念を用いて京都あるいは京都人の特徴について考察を加えることを目的とする。京都あるいは京都人に関してはこれまで幾多の研究がなされているが、本稿では、社会学の、他の学問にはない特有の概念を用いることによって、これまでは気づかれることのなかった京都の特徴を明らかにすることを目指している。

(以下、各項目において、Aは社会学概念の説明、Bは、それを用いての京都論である。社会学概念は広義で用いており、人類学の概念や、経済学でも用いられる概念を含んでいる。)

1. 伝統の創造

A 1983年に エリック・ホブズボーム(Hobsbawm)が「伝統の創造」(あるいは「創られた伝統」という概念を提起した。この概念は、社会全般の人たちが、昔から伝わってきた伝統だと考えているものの多くは、実は、主として19世紀以降に、選挙制民主主義の普及による大衆政治の出現という状況の下で、国民的な文化統合を図ろうとして人為的に作り出されたものである、ということを示す概念である。

ホブズボームは、「創り出された伝統」を以下のように定義している [Hobsbawm: 訳10]。「通常、顕在と潜在とを問わず容認された規則によ

って統括される一連の慣習であり、反復によってある特定の行為の価値や規範を教え込もうとし、必然的に過去からの連続性を暗示する一連の儀礼的ないし象徴的特質。」「こうした意味での(創られた)「伝統」というものは、いわゆる「伝統」社会を支配する「慣習」(カスタム)とは明確に区別されなければならない。」いわゆる通常の意味での伝統社会の慣習は環境の変化に応じて変化するが、ここで言う「伝統」は何らかの規範を反映しているので変化することはない [訳13]。

「伝統の創出と見なされているものは、……過去を参照することによって特徴づけられる形式化と儀礼化の過程のことである」 [訳13]。通常の意味での「伝統の強さや適応力は「伝統の創出」と混同されてはならない。昔のやり方が生きているところでは、伝統は復活したり、創り出されたりする必要はない」 [訳18]。「近代「国家」を主観的に作り上げたものの大部分は、そうした(「伝統」的な)構築物によって成り立っている」 [訳26]。

「創られた伝統」の例としては、例えば、英国の王族の結婚パレードがある。これは、かつてのダイアナ妃や近年のウィリアム王子の結婚式の際に世界中に中継放送されたが、その際、伝統に則った式典、などの解説が為された。しかし、実際は、英国の王族の結婚パレードは、1923年、後のジョージ6世が王子の時に、父王ジョージ5世が、国民の間に人気を広まることを期待して行ったものが最初で、歴史はたかだか90年にすぎない。

日本でも同様に、皇族の結婚式は短い歴史しかもたない。それが最初に行われたのは、1900(明治33)年の、皇太子(後の大正天皇)の結婚式である。現在も行われている皇族の結婚式は、この時が最初であった。史上初めてとなる結婚式を挙げるに当たって、結婚の儀式の内容を定める必要が生じた。何しろ、それまで行ったことがないことを行うのであるから、一から考える必要があった。そこで、歴史学者を集めて、『古事記』『日本書紀』等の記述を参考にして、結婚の儀式の次第を作り出したのである。

B 京都に関わって著名な事物で、長い歴史を持っていると多くの人たちに考えられているものの中には、まさに「創造された伝統」がある。

京都の中心的な観光地の一つである平安神宮は、決して平安時代からあったものではなく、平安遷都1100年を記念して1895年(明治28年)に、しかも内国勸業博覧会というイベントの目玉として作り出されたものである。まばゆいばかりの金箔で有名な鹿苑寺(金閣寺)の金閣も、長らく金箔が剥がれ落ちていたものを、1950年の放火焼失後に再建された際に、より豪華になるように、以前より厚く金箔が張り替えられたものであり、その意味で「創り出されている」。祇園祭の鷺舞は、江戸中期に断絶していたが、1956年に木村正雄が、山口県に伝わっていた鷺舞を参考にして復興したものである。

石堀小路(いしべこうじ)も典型である。これは、祇園の一角にある、石畳が敷き詰められた小道で、両側に料亭や旅館が並んでいて、いかにも京都、という、京都を絵に描いたような場所であるが、もともとは、圓徳院という寺院の境内であった。それが、税金を払うために、大正時代に土地の一部を売却したところから今の石堀小路は始まるのである。しかも路面の石畳は、昭和になってから、市電の軌道に敷かれていた敷石を移設したものである。京都御所は、幕末期まで帝の居住区の周辺に住まいしていた公家たちが、明治維新後に東京へ引っ越して空き地になった所を整備したもので、現代の人が知っている「京都御所」の歴史は浅い。

そのような、観光で訪れる場所だけでなく、「文化」に属する領域でも、「伝統の創造」がなされている。

茶の湯は現在隆盛を誇っており、著名な茶道家は社会の名士の扱いを受けているが、歴史を通じて常にそのような位置づけをされていたわけではなく、明治維新の頃には大きく衰退していた。それが、その後、現在の茶の湯の地位にまで復興してきたのである [桐谷：338, 358]。明治維新後、価値観の変化に伴い、茶の湯は衰微し、廃仏毀釈による寺院の荒廃に伴って、多くの茶室が失われた。ところが、それとは別に、それまで奥向きに

あった茶室が、博覧会での展示などの際に記念物的なものとして表に出てきた。また、千利休が顕彰され始めることにより、また、秀吉の人气が拡大するとともに、茶の湯の再評価がなされる。茶の湯自体の性格も、それまでの遊芸的と見られたものから精神性の重要性が語られるものへと変わってきた。その意味で、一から作り出されたわけではないが、伝統が「創造された」ということができる。

2. 罪の文化・恥の文化

A 「罪の文化(guilt culture)」、 「恥の文化(shame culture)」という概念はルース・ベネディクト(Benedict)の著書において提起され、以後、日本人と西洋人の比較をする際には、公式のように用いられている概念である[Benedict：訳257-]。

「罪の文化」とはキリスト教文化圏の特性とされるもので、道徳の絶対的規準が存在し、それに従って、内面的な罪の自覚に基づいて善行がなされる文化である。この文化のもとでは、誰にも知られなくても罪の意識に悩む。他方、「恥の文化」とは日本社会を特徴付けるもので、世人の評価に気を配って、外面的強制力に基づいて善行が為される。「旅の恥はかき捨て」という言葉が、その点をよく表現している。恥は罪と違って、懺悔や贖罪によって軽減されることはない。

恩や義理、恩返し、忠義、という観念は、「恥の文化」ゆえである。主君や近親、他人に対する義理は、返すことができるものであり、義理を果たさなければ、世間から恩知らずと言われて「恥」をかく。忠臣蔵は、主君の恥をそそぐために決起した物語であると言える。

ベネディクトから、いくつか引用する。「さまざまな文化の人類学的研究において重要なことは、恥を基調とする文化と、罪を基調とする文化とを区別することである。道徳の絶対的規準を説き、良心の啓発を頼みにする社会は、罪の文化'guilt culture'と定義することができる。」罪の文化の

社会においては「罪を犯した人間は、その罪を包まず告白することによって、重荷をおろすことができる。」他方、「恥が主要な強制力となっているところにおいては、たとえ相手が懺悔聴聞僧であっても、あやまちを告白しても一向気が楽にはならない。それどころか逆に、悪い行いが「他人の前に露見」しない限り、思いわずらう必要はないのである」〔Benedict：訳257〕。

「真の罪の文化が内面的な罪の自覚にもとづいて善行をおこなうのに対して、真の恥の文化は外面的強制力にもとづいて善行を行なう。恥は他人の批評に対する反応である。人は人前で嘲笑され、拒否されるか、あるいは嘲笑されたと思いこむことによって恥を感じる。いずれの場合においても、恥は強力な強制力となる。」「名誉ということが、自ら心中に描いた理想的な自我にふさわしいように行動することを意味する国においては、人は自分の非行を誰一人知る者がいなくても罪の意識に悩む。」「日本人は恥辱を原動力にしている。明らかに定められた善行の道標に従えないこと、いろいろの義務の間の均衡をたもち、または起こりうべき偶然を予見することができないこと、それが恥辱(“ハジ”)である。恥は徳の根本である、と彼らは言う」〔訳258〕。

「恥を知る人」という言葉は、ある時は‘virtuous man’〔有徳の人〕、ある時は‘man of honor’〔名誉を重んずる人〕と訳される。恥を深刻に感じる国民は、「ただ他人がどういう判断を下すであろうか、ということ推測しさえすればよいのであって、その他人の判断を基準にして自己の行動の方針を定める。みんなが同じ規則に従ってゲームを行ない、お互いに支持しあっている時には、日本人は快活にやすやすと行動することができる」〔訳259〕。

B 日本社会全体に当てはまることであろうが、京都では特に次の点が言える。京都では、いたずらをした子どもに注意する時に「これこれ、そんなことしてたら、隣のオッチャンが怒らるはえ(隣のおじさんが怒るよ)」な

どと言うことが多い。これは、他人の評価を気にして自分の行動を律することを求める点で、「恥の文化」を典型的に表すものと言えよう。このことについて大淵幸治は、『隣のオッチャン』を使うのは、それが自分自身のためではなく、他人という存在を子どもに認識させるためだと考えるのである」と説明している [大淵：122]。それは、親が叱る責任を放棄したのではなく、子どものしつけを他人に依存しようというのでもない。これは恥の文化の一つの典型であると言える。

3. 境界人(マージナル・マン)

A 「境界人(marginal man)」とは、青年が子どもでもなく大人でもないように、互いに異なる文化を持つ複数の社会(集団)に属することによって、それらの社会のどこにも所属しきれず(あるいは、境界に位置し)、その複雑な状況にあって葛藤し、不安定な心理を持ちやすい人を言う。不安定な心理ゆえに、いずれかの社会に過同調する場合もある。

境界人は一貫した信念体系や行動様式を持ちにくく、心理的な緊張が続く、自己や社会に対して否定的・厭世的な傾向をもちやすい。他面、自明とされる世界観に対して一定の距離を取ることにより、相対的に自由・客観的な視点をもつことが可能となる。

境界人の例は多数挙げることができる。青年はどの社会においても境界人の典型例である。アメリカ社会では混血などによって複数の人種的文化的背景を持つ人、ヨーロッパ社会ではユダヤ人がその例となる。日本では在日韓国朝鮮人が典型である。在日韓国朝鮮人は、日本で生まれ育ち、言葉は大抵の場合、日本語しか使えない。食生活を初めとした文化に関しては日本文化を身につけている。しかし、国籍の点ではあくまで韓国人(あるいは朝鮮人)であり、一般の日本人の心理においては、完全に受け入れられないことが珍しくない。

(注) ジンメルの言う「異郷人(Fremde)」の概念はマージナル・マンの概念と類似しているが([Simmel: 訳下巻285以下]), 次の点で異なっている。異郷人は、2つの集団に属する存在ではなくて、どこにも所属しない存在である。決して放浪者ではないが、来訪と退去という離別を完全には克服していない。定着したとしても所属はしない。このような異郷人は商人として現れることが多く、他の地域から商品を持ち込んで、また他の地域へ商品を求めに行く。古典的な例はヨーロッパのユダヤ人である。異郷人はまた、それゆえ、土地を所有しない。これらの特徴から異郷人は客観性を備える。それは距離と無関与を意味するのではなく、関与と無関心から成っている。

B 京都人は、かつては都人だったが、今はそうではない、という意味で、現在都である東京の人とも、一度も都であった歴史をもたない地域の人とも違い、マージナル・マンとしての特徴をもつと言える。いわば、時間軸上の境界人である。

京都人の悪名高い特徴とされる「イケズ」は、通常、「陰険で意地悪で皮肉屋の上にイヤミな毒舌家」[入江: 9-]の発する言葉で、他の地域の者は、それに苦しめられる、と言われている。この、複雑で一筋縄ではいかない特徴は、京都人が、かつて都人であったが、今はそうではないというマージナル・マンの特性を持つことから生ずるものと考えることができる。

ただし、そのような表面的なイケズの理解に対して、入江敦彦は、イケズの正しい理解として次の点を挙げている [入江: 12-]。これを見れば、京都人がマージナル・マンであることが一段と明確になる。

- 1, イケズは陰険ではない。陰険というのは相手によって態度を変えることであるが、イケズには裏表がなく、必要な場合には誰に対しても向けられる。
- 2, イケズは意地悪でもない。他人の滑稽さを笑うために表立たせるのが意地悪だが、イケズは、滑稽なものを揶揄することはあるが、笑うために人を貶めることはない。
- 3, イケズは皮肉とも違う。皮肉は、相手に己の愚かさを気づかせるた

めの道具だが、イケズは、イケズであることを理解できないような愚かな人は相手にしない。

- 4、イケズはイヤミでもない。高い位置に立って高慢で高飛車なのがイヤミだが、イケズの視線は水平であり、同じ立場から発せられる。また、相手を特定せずに撒き散らされるのではなく、イケズは狙いを定めて決め撃ちする。
- 5、イケズは毒舌とほとんど無関係である。毒舌家はフランクな物言いをするが、イケズは、厳しいことを糖衣に包んで言う。
- 6、イケズは天邪鬼とも一線を画する。天邪鬼は甘えと依存から出るが、イケズは老成した感性である。
- 7、イケズはイジメとは正反対である。イジメに理由はいらないが、イケズにはイケズせざるを得ない、やむにやまれぬ理由が、相手方にあるのである。

4. 中心と周辺

A エドワード・シルズ(Shils)に依ると、「中心(center)」とは、社会において、伝統を体現した核心にあるものである。そして、そのような「中心」を体現する人たちが、社会を支える中心的な人たちである。この「中心」という観念は、それを基準にして、政府や社会の中心的な制度・人物を評価することができるもので、もし欠けたものがある場合にはそれを発見する手がかりともなる。

この中心は、地理的に中央にある訳ではない。中心とは、政治的な意味でも宗教的な意味でも、単に機能上の中心という意味ではなく、象徴的な要素が大きいからである。象徴的な要素が大きいのは、中心という観念が伝統を重視する価値観を体現しているものであるからである。

この中心に対して「周辺(周縁.periphery)」は、中心のもつ価値をもたない、それ自体では、中心でないものに過ぎない残余的な観念である。た

だし、その「周辺」に、もう少し積極的な役割を付与すると、中心に対する批判的な役割、さらには改革的な役割を果たしうようになる。

(注) シルズ以降、上記の中心概念とは、やや異なった視点から、ウォーラーステインらが、中心(と周辺)の概念を提起し、世界経済における先進地(中核諸国)と辺境の間の格差に適用した[Wallerstein: II 訳283-]。支配的で発展を先導していく部分が「中心」であり、それに支配され従属する部分が「周辺」である。それは、国際社会でも国民社会内部でも、国・地域間の経済発展・社会発展の不均等性と、そこから生じる収奪・支配関係の解明に適用される。国内では、都市と農村、大企業と中小企業などの解明にも適用される。周辺部に、社会全体のあり方を問い直す役割を与えようとする発想にも繋がる。従属理論や不均等発展の理論、世界システム論において用いられる。

B 京都は文化的には、かつては言うまでもなく、今もなお、中心である。木津川計は京都人の中心性に関して次のように論じている[木津川: 224-]。京都人の気位は高い。それゆえに東京や大阪に関心を示さず、大阪へ文楽を見に行くことは少ない。また、大阪と同一視されて上方と見なされるのを嫌う。京都に関する味わい深い随筆を書いた岡部伊都子を京都人は評価していない。それは、彼女が、京都について文章を書いているものの、出身は大阪であって京都ではないからである。

このような点に見られる京都の閉鎖性・排他性は、京都が日本文化の規範という自覚ゆえだと木津川は理解を示している。京都人は気位が高いので、人からものを頼まれた時に、一度で引き受けることをしない。他府県の間人は、それで諦めてしまって、京都の人は冷たいと考えてしまいがちであるが、一度断られても、再度丁寧をお願いをすると、京都人は引き受けてくれるのである。

言葉の伝播についても京都の中心性が言える。柳田國男が『蝸牛考』で述べたように、言語は社会の中心部から周辺に向かって伝播していく[柳田: 189-]。現在、標準語では通常はカタツムリと呼ばれる生き物は、京

都付近では、デンデンムシ、その東西の地域や東海地方ではマイマイ、さらにその外側の地域でカタツムリ、そして、京都から最も離れた東北と九州ではナメクジ、と呼ばれている。これを柳田は、京都で最も古い時期に使われていたのはナメクジで、その後、カタツムリ、マイマイという語が生まれ、京都で使われなくなった語は、順に遠方へと伝播していき、それぞれの地域で生き残っているのであると言う。

外国でも、17世紀初めにイギリスを離れたピューリタンたちはアメリカ中西部に落ちていたが、その地で、当時の英語をおよそそのままの形で今に伝えている。その間、イギリス本国では英語は変化を遂げていて、当時の英語とはかなり変わっている [Bradley：訳257-]。スペイン語も同様で、現在南米で使われているスペイン語が、かつての姿を留めたものであり、現在のスペイン本国のスペイン語は変化を遂げた後の形を持っている。

京都の言葉もその例に漏れない。ここでは、「アホ」と「バカ」という語について、それを見ることにする [松本：70-]。「愚か」という意味を表す語として、現在、京都を中心とする関西地方では「アホ」が、東京などでは「バカ」が最もよく使われている。その違いがどこから来たのかを考えると、かつて京都で使われていた「バカ」が周辺地方に伝わって行って、その間に、京都では新しく「アホ」が誕生したということが判る [松本：106]。

京都の言葉は東京と大阪のどちらの言葉に似ているかを問うことができる。その問いに対しては、考えるまでもなく、大阪の言葉に近いと言えそうだが、実はそうでもない面があつて、都(中央)の言葉と地方の言葉という区別をすることができる。

	東京標準語	京都弁	大阪弁
(否定)	行かない	行かへん	行けへん
(尊敬)	行かれる	行かはる	行きはる
(不可能)	行けない	行けへん	行かれへん

否定の助動詞として、東京では「ない」を、京都と大阪では「へん」を使っている。しかし、その語を、活用の点から見ると、京都と東京が同じで、大阪は異なる、という点が明らかになる。すなわち、東京の「ない」、京都の「へん」とも、未然形につけるが、大阪では「へん」を仮定形に付けている。

同様に、尊敬の助動詞、東京の「れる」、京都の「はる」は、動詞の未然形に付けるが、大阪では「はる」を連用形に付ける。

不可能の意を表すのに、東京と京都では、動詞の可能動詞形「行ける」の否定形を用いることが多いが、大阪では、「行く」の未然形に可能の助動詞「れる」の未然形「れ」を付けて「行かれ」とし、それに「へん」を付ける。

このように、京都の言葉は、大阪よりも東京と共通性がある。他の地域の人々は京都の言葉と大阪の言葉の違いをあまり認識していないので、正しい区別をせず、京都弁のつもりで「行きはる」などと言うが、これは京都人にとっては大きな違和感を覚える語法である。

5. 大衆社会

A 現在のわれわれの社会は民主主義社会である。民主主義社会は、人々が理性的に思考・判断・行動する、という前提で成り立っている。しかしながら、時代が進むとともに、実際の社会を構成する人たちは、必ずしも理性的ではないことが明らかになってきた。そこで、そういった現代の社会を「大衆社会」ととらえる見方が登場してきた。その見方においては、人々が理性的に思考・判断・行動する、ということを前提せず、感情や、マスメディアなどの他者からの影響を強く受ける、と考える。

政治(代議制)に関しては、立候補した者の理性的な主張を、選挙民が理性的に判断して投票をする、ということは必ずしも実際には存在せず、むしろ、候補者の政策よりも資金力による大がかりな宣伝の影響を受けて、

選挙民は必ずしも理性的にではなく、感情やメディアの影響で投票相手を決める、という事態が生じている。また、そのような、非合理的な投票行動にすら至らず、そもそも政治に関心を持たない人々も多数存在する。

彼らは、政治以外の場面でも、自らの思考の結果である自分自身の判断を持たず、大規模メディアが発する情報、広告や広報に影響されて、他の多くの人々と同じ画一的な思考様式を持つに至ることにもなる。

また、大衆社会のもつ特徴の一つとして、中間集団が無力化し、その結果、大衆が大規模メディアの影響を直接的に受けるようになることがある。そのことは、権力と大衆が直接に結びつき、独裁的なカリスマへの支持が広がることにも繋がっていく。

東京都や大阪府では、弟に有名な俳優をもつ人物や(本人も作家であるが)、テレビ番組で有名になった弁護士が、知事選挙で大量の票を獲得して当選した。そして、当選後は、両者とも、根強い人気を背景にして、強権的な都政・府政を押し進めている。そして、それがまた、一部都民・府民の支持を獲得する、というサイクルが生み出されている。

B 京都は、他の大都市と比較すると、大衆社会的な特徴が薄いと言えるように思われる。選挙に関しては、東京都や大阪府で典型的な大衆社会的状況が出現しているのとは異なって、京都では、メディアを通じて有名になった人物が立候補しても、東京や大阪のように票を集められないように思える。政治的関心も、京都では他都市に比べて高かったと言えよう。日本では常に少数派であった日本共産党への支持が、長らく京都では他都市に比べて高かった。

政治以外の点でも大衆化の度合は低い。芸能人に対しても熱狂というもののが弱く、大都市である割にはコンサートに聴衆が集まりにくいと言われている(武田鉄矢や、さだまさしの発言による)。

また、中間集団の弱体化に関しても、東京や大阪の都心が、官庁街や商業地と化して住民が少なくなったのと異なり、京都の都心は、職住一体の

特性があることから住民が居住を続けており、町内会も存在して、中間集団の弱体化という現象は見られない。

大淵幸治は、「赤信号をみんなで渡らない京都ジン(人)」と言っている[大淵：29-]。建都1200年を迎える年に、京都市や財界人が率先して記念イベントが開催されたが、結果は失敗であった。京都の超有名文化人や財界人たちが名を連ねて協賛者を募ったが、協賛を募られた中小企業主には、大義名分や権威を掲げたものであればあるほど反発するという気風がある、と大淵は説明している。

6. D・リースマンの人間類型

A 大衆社会的状況と関わって、デイヴィッド・リースマン(Riesman)による人間類型の区分を考えることができる。リースマンは、人間類型を、「伝統指向型」、「内部指向型」、「他人指向型」の三つに区分した[Riesman]。「伝統指向型」とは、昔から社会に伝わってきた伝統を重視し、それに従って考え行動する類型を指す。前近代的時代に一般的に見られた類型である。

「内部指向型」とは、自分自身の内面に確固とした価値観を持ち、それに従って自らの行動を律する、というタイプである。「ジャイロスコープ」を内部に装着しているとも喩えられる。近代的な人間類型である。最後の「他人指向型」とは、他人やマスコミの考え方を見て考え行動する。「レーダー」によって周囲の状況を探索していると喩えられ、現代大衆社会の人間の類型と言われる。

リースマンからの引用によって補足しておく。彼の書物では「伝統指向から内部指向を経て、他人指向型に到る歴史的变化」を論じているのであって、それらを、「適応型」、「自律型」、「アノミー」という心理学的な適応の様式の区別と混同することは正しくない[Riesman：訳4]。「内部指向型」等の類型は、個人の「社会的ないし職業的役割を説明するためには役に立つかもしれないが」、個人の特性そのものに「あてはめることは、

よしんば不可能でないにしてもきわめてむずかしいことである」〔訳4〕。「他人指向型」の好ましい側面としては、「解放性だの、抑圧がないことだの、他人に対する関心だの、変化につねに対応できるような性質だの」を挙げることができる〔訳5〕。さらに、「他人指向型の人間は尊敬されるよりもむしろ、愛されることを求む。かれは他人を屈服させることはほとよりのこと、他人をあざむいたりすることを求めない。むしろ、自分と他人とを結びつけようとするのである。……いわばかれは、ガラス張りの家の中に住んでいるのである。レースやベルベットのカーテンで自分を外側からへだてるようなことをかれはしないのだ」〔訳7-8〕と言われる。他方、「内部指向型の社会性格」についてリースマンは、「われわれはマックス・ウェーバーにしたがって、おそらくギリシヤ的な合理性とユダヤ・キリスト教的な現世的道徳の結びつきによって生れたプロテスタントの倫理がなんらかの形でこの社会的な生活と関係していると考える」〔訳12〕と言う。

B この3種の人間類型に基づいて考えた場合、京都は千年の古都であり、豊かな伝統を持っているので、京都人は、伝統指向型と思われやすいが、それだけではなく、主体的に判断する内部指向型の要素も強い。

明治以降、京都は、伝統を受け継ぎつつも、時代の先進的な文化を取り入れてきた。それは、琵琶湖疏水であり、市電であり、活動写真である。現在も、景観論争を呼び起こしながらも、京都タワーや京都駅ビルなどの現代的な建築物を造ることを続けている。同じく古都と呼ばれる奈良には、その要素は大きくないことと比較すると、京都の特色が浮かび上がる。

また、いわゆる老舗も、昔から伝えられてきた商品を単に作り続けるだけでなく、時代に合った新しい商品をも産み出している。例えば、京都土産の定番の一つである「八つ橋」は、従来の堅焼きのものに加えて、現在では、生の八つ橋に餡やクリームを挟んだ商品をも販売していて、現代人の味覚には、こちらの方がよく合っているようである。また、ゲーム機で世界的に有名な任天堂は、元来は花札を製造する会社であったが、時流

に合わせてゲーム機を作るようになり、今ではゲーム機の売り上げの方が圧倒的に多い。

7. ハレとケ

A ハレとは「晴」で、非日常的な、改まった場合を指す。ケとは「曇」で、普段・日常を指す。ハレは、ハレ着、ハレの日、ハレ舞台、のような、改まった気持ちを伴う状態を指す。ケは、こうした特別な要素をもたない通常の状態である。その意味でハレ・ケは聖・俗の対比に似ているが、同じではなく、ハレは必ずしも聖ではない。ハレには神社でのお宮参りのような聖もあるが、地域の小学校のPTAの行事で司会を務めるという場合もハレである。ケも、仏壇に毎日、供え物をするのは、聖の領域に関わっている。

このようなハレとケに、「ケガレ」を加えることができる。ケは農業生産を可能にする一種のエネルギーで、それが消耗すると「ケガレ(ケ枯れ)」がもたらされ、日常活動が衰退する。そこで、失われたケの機能を回復するためにハレの諸儀礼が行われると言われる。

これらについて、桜井徳太郎たちは概略次のように説明している[桜井：20-26]。柳田國男がハレとケの問題にアプローチした素材の中心は食物あるいは食習慣であって、それ以外のものに適用するのは、その後のことである。「通常(ケ)」の生活が続いていくとマンネリ化して無気力になる。そこで必然的に変化(ハレ)を求めて、生命の活性化をもたらすのである。そこに「ケガレ」という概念を加えて考えることもできる。ケは元気や気持ちの「気」でもあるが、それが消耗してくると「枯れ」た状態になり、それを「ケガレ」という。そのエネルギーの欠如した状態から回復するためにハレが必要になる。

B 京都という都市のイメージは、住民自身よりも、外部者によって作ら

れてきたと言われる〔江口：117〕（ただし、このことは、京都に限られるわけではない。一般に観光地のイメージは旅行案内などで前もって作られたもので、旅行とは、そのイメージを現地で確認する作業であるとも言える）。

特に京都以外の人々がイメージする京都は、ハレの京都であって、それとは別のケの京都の生活を京都人が普段送っていることは、他の地域の人たちの念頭にはあまり思い浮かばない。ハレの京都に、普段、京都人自身は触れることが少ない。金閣寺や清水寺のような観光寺院へ行くことはあまりないし、京都の象徴である祇園や舞妓さんは、大部分の普通の京都人には縁のないものである。

ケの例としては、例えば、毎朝主婦が自宅の前の道路を掃除する時の暗黙の決まりがある。それは、自分の家の前を掃除する時に、ついでだからと言って、他家の前まで掃除することはしないという習慣である。これは、他人のことには立ち入らない（同様に、自分のことには立ち入ってほしくない）という精神から来ている。

町家は近年、大変に注目を集めているが、町家がレストランなどに使われることは「ハレ」に属すると言える。それに対して、町家で実際に暮らすことは「ケ」であり、その違いは大きい。そして「ケ」の町家はあまり知られていない。レストランとしての町家で食事をすることは興趣に富んでいるが、町家で暮らすことは、それとは異なって単調で、快適とは言えない。間口が狭く奥行きは深く、隣の家とは密接している（あるいは一つの建物を分割して住居としている）ので、建物の側面から光が入ることはなく採光が悪い。天窓や坪庭を作ることで採光を確保しようとしているが、それらは苦肉の策であって、不十分であることには変わりはない。また通風も良くないことが多い。建物が南北に向いている場合はそうでもないが、それ以外の向きの場合には風通しが悪く、夏は非常に暑い。他方、冬は、採光が悪いことも原因して寒い。特に通り庭の台所付近は、天井が高いこともあって、底冷えがする。

8. 都市化

A 都市化(アーバニズム)について、ルイス・ワース(Wirth)から引用する。「都市的生活様式の明確な性格は、社会学的には、第一次接触の第二次接触との交替、親族の紐帯の弱化、家族の社会的意義の減少、近隣の消失、および社会連帯の伝統的基盤の崩壊にある」[Wirth：訳143]。「とくに大切なのは、アーバニズムを産業主義(industrialism)や近代資本主義(modern capitalism)と混同する危険に注意することである」[訳133]。都会人は「特定の人々に頼ることは少なく、他人への依存は非常に断片的な他人の活動範囲の局面にかぎられている。これが本質的には都市が第一次的接触よりも第二次的接触によって特徴づけられているといわれることの意味である」[訳136]。

また、アーネスト・バージェス(Burgess)は、同心円理論を唱え、都市は都市域が拡大するとともに、同質的な地域が同心円状に外側へ移動していくと論じた [Burgess：訳116-]。典型的なモデルとしては、町の中心(ダウタウン)にビジネス地区があり、そこから放射状に街が拡大していく。ダウタウンを囲んで、ビジネスや軽工業が浸食している推移地帯(Zone of Transition)がある。推移地帯は退廃的な性格をもっているため、そこから逃避し、かつ通勤に便利な所に住む工場労働者の住宅地区(Zone of Workingmen's Homes)がある。その外側に、高級アパートやビル、独立住宅からなる住宅地域(Residential Zone)がある。その外に通勤時間1時間以内の人たちが住む郊外地域(Commuters Zone)が広がる。「都市発展の一般的過程は、求心化(concentration)と離心化(decentralization)の対立的にして、しかも相互補足的な諸過程を含んでいる」[訳117]。バージェスは、都市を単に拡大するものと見るのではなく、それと同時に、経済的・政治的・文化的機能が都心部に集中することにも注意を促している。

バージェスの理論を別の形で表現すると、郊外化と都心の空洞化という

ことになる。都市域が拡大し、住民がより外側に向かって移住することで「郊外化」が生じ、それと同時に、都心部では住民がいなくなって「空洞化」が起こる。

都市中心部の空洞化の例として東京を挙げることができる。東京では、国会議事堂の近くに、かつて永田町小学校があった。しかし、今では小学校としては使われていない。住民が殆どいなくなってしまったからである。国会議事堂の他、首相官邸、国会議員宿舎など、国家の中核機能が拡充してくるにつれて、住民は他の地域へ移住して行ったのである。

B 京都も大都市であるので、都市化の特徴が現れているが、その特徴の現れ方が必ずしも典型的ではないという面がある。

「都心の空洞化」に関しては、京都もそれに当てはまるが、他面、それを押しとどめる要因もある。京都の都心部で特徴的であった産業は織物業であったが、服装の洋装化の進展により廃業する企業が続出し、その結果、都心部は空洞化をし始めた。それにより、祇園祭で鉦を出す町内でも、住民(織物関係の企業を営む住民を含む)の他地域への転居が増加し、祭の遂行に困難を伴うようになってきた時期があった。

しかし、他面、京都の都心部は、織物業だけでなく様々な業種が、とくに職住一致の形態で存在しているので、都心部が全く空洞化した訳ではなかった。

「郊外化」に関しては、京都は南以外の三方を山で囲まれているので、文字通りの都市域の拡大はできない。初期に市街から転出した人たちは、東山連峰の東にある山科へ転居した。山科も人口密集地帯になった後は、市街の南方にある宇治や城陽、あるいは、JR 沿線を伝って、滋賀県の大津や草津へ移住する人が増えた。

9. 文化資本

A 「文化資本」という概念をピエール・ブルデュー(Bourdieu)が提起した。それは、経済的な資本になぞらえて、文化の面で、上層の人たちがもっている価値物を指す概念である。文化資本を所有することは他の階層の人たちに対する優越性を示し、支配階級は、「正しい」文化として、それを下層階級に押しつける。このことは階級差の明白なヨーロッパ社会では判りやすい。文化資本は、形態で区分するならば、形のある資産(絵画・骨董・道具など)、学歴・資格などの資産、行動の仕方(ものの言い方、振る舞い方、好きな音楽のジャンル、利用する店)に区分できる。

(注) ソースタイン・ヴェブレン(Veblen)の言った「誇示的消費(奢侈的消費、衛示的消費)」という概念は、文化資本の概念と似ている面があり、それとの比較を行うと、また新しい面が明らかになると思われるが、ここでは取り上げない。

ブルデューからの引用によって敷衍する。趣味は所属階級によって異なるが、音楽も例外ではない。上流階級はバッハの「平均率クラヴィーア曲集」や「フーガの技法」のような最も「純粹」な美的性向を要求する作品、絵画ではモンドリアンのような抽象的な作品を好み、現代美術館にもよく足を運ぶ。他方の極の階級の人々は、音楽では、ビゼーの「アルルの女」、ヨハン・シュトラウスの「美しき青きドナウ」、またオペレッタを聴く。好みの絵画のジャンルは幅広いが、ピュッフェ、ヴラマンク、ユトリロ、ラファエロ等々が含まれる [Bourdieu: II 訳10]。上流階級にとっては観劇は単に劇を見るためだけのものではなくて、社会的儀式として、社交としての意味を持っており、適切な装い、振る舞いが求められる [訳25]。

形を持った資産としての「文化資本」と並んで、「高級な対象を所有化できる能力」というものが存在している。その能力を獲得するためには、富裕であることが前提となるが、絵画や音楽について学び、たびたび鑑賞に

出かけ、場合によっては、絵画の描き方や楽器の演奏法を習う等のように、相当量の時間の投資が必要である〔訳42〕。そうすることによって初めて文化資本に相応しい能力を身につけることができる。

B 京都は、公家や寺社を中心とした支配階級、富裕階級が文化を伝えてきており、典型的に文化資本の豊かな都市であると言える。茶道具のような形のある文化資産、上層の人たちの一員と認められることの必要性、茶の湯などの場面で求められる所作、これら三つの種類の文化資産とも、その例を挙げることは容易である。

文化資本の特徴の一つに挙げられる、抽象的なものを好む、という点では、京都の文化では多くの例を挙げるができる。和菓子は、味とともに、季節を表現しようとしている点を味わうことができるが、京都の和菓子は、例えば、水色の地に赤い縞模様を入れて、流れに浮かぶ紅葉の葉を表現する、というようなことをして、抽象的な表現を見ることができる。これは、東京などの和菓子が、紅葉の形を作って赤色に着色し、それによって秋の季節を即物的に表現することが多いのと対照的である。

抽象的なものを好むという点に類似して、それ自体は持っていない意味を外から付与して、特別な意味を持たせる点を挙げるができる。寺院の枯山水の庭は、砂利を敷いた中に、岩をいくつかずつ組み合わせて並べ、そこに大海や島々を見て取るものである。茶道も、即物的に茶を飲むのではなく、茶を飲む部屋、用いる道具、淹れる手順、飲む作法、等々に外から精神的な意味を付与している。

枯山水にしても茶の湯にしても、それは或る意味では無意味な見立てであるが、それを深い意味のあるものと理解して味わうことのできる者のみが、これらの世界に入ることを許され、これらを理解する人々の一員に加えられる資格を持った者として遇せられるのである。

そこには、また、茶を入れる手順、飲む作法等々に、特別な所作が求められ、ここにもまた、文化資本の特徴が現れてくる。

10. 文化と文明

A 「文化」と「文明」は区別されている。文化は精神的な所産で、文明は物質的・制度的な所産である。文化には、宗教、学問、芸術、道徳などが含まれるが、それらは、長年の蓄積を必要とするもので、長年蓄積されてきたその場所に根付いていて、他の場所への移動・移植は容易でない。他方、文明は、モノ、産業、法律などである。それらは先進文明地から他の地域へ運ぶことが、文化に比べると容易である。文化と文明はこのような違いがあるので、「機械文化」や「伝統文明」という語は普通は用いられない。

文化と文明の違いについて山上徹は次のように述べている [山上：148]。文化(culture)はラテン語の *cultus* に由来し、田園での土地の耕作(*cultivate*)とも関係がある。土地空間に根ざし、何かを丹精込めて作り上げることを意味する。さらに、心を耕すという精神の開発が背景に存在する。文化は、田園的、精神的、知的なものである。一朝一夕で形成されるものではなく、長年の間に蓄積された生活様式や行動様式として現れた宗教、習慣、しきたり、道徳などの精神的な価値観を含む。

文明(civilization)は都市(civic)や市民(civil)に由来する。物質的な機能や生活諸条件をコントロールするシステムや生活の手法の進歩を意味する外部生活の発達過程である。モノの豊かさを追求するための産業その他のシステムの発達過程である。

B 文化か文明かと言えば、京都は文化の都市である。他の先進都市がかなりの程度失ってしまった歴史と伝統が色濃く残っており、それゆえ、文明人(観光客)が文化を求めて国内外から入洛するのである。

河野健男は京都の観光について次のように述べる [河野：149-154]。京都観光は大量に画一的な財やサービスを提供するマスレジャー型ではなく、

自己省察を伴う品格ある観光である。京都への旅は、遊ぶ旅行とは別の、非日常の中で自己の内面に立ち返る旅である。多くの人が心のふるさとを京都へ探しに来るのであり、各地にある、それに準ずるものが小京都である。

木津川計は、都市のグレードを図る基準は経済ではなく文化だと言っている [木津川：232]。その文化の内実には、1、文化の蓄積、2、景観の文化性、3、発信する情報、という三つの要素があるが、京都にはどれもが揃っていると言う。1の文化の蓄積については説明を要しない。2としては、街並みと周囲に見える山並が挙げられる。3の例としては、季節ごとの諸行事がそれに当たる。4月の花街の踊りから始まって10月の時代祭に至るものがそれである。この観点から関西の三都市を序列づけると、京都—神戸—大阪、の順になると言う。

このように、京都は文明よりも文化が重要な地位を占める都市である。それはその通り正しい。しかし、京都は他面、明治維新以来、文明に属するものをも積極的に評価して取り入れて来た。1890年には琵琶湖疏水を開通させ、それによって生み出された電力を、産業のみならず、日本初の市街電車の導入につなげた。もっと時代が下って現代になると、オムロンや京セラなど、時代の先端的なIT産業も京都では誕生している。建築物では、景観論争を呼び起こしつつも、京都タワーや京都駅ビルのような斬新な建物を建てている。

文化のみでなく文明をも積極的に取り入れるのが京都である。

11. 工業形態の変化

A 工業生産のあり方は、時代とともに、手工業、問屋制家内工業、工場制手工業(マニユファクチュア)、工場制機械工業と変化してきた。当初は、個人が、機械ではなく道具を用いて製品を製造していた手工業の時代があった。その後、生産規模の拡大が必要になると、問屋と呼ばれる業者が発生し、その業者が生産過程全般を取り仕切って、デザインから材料までを

提供して、自宅で製造に携わる個人業者に発注し、出来上がった製品は問屋が販売する、という問屋制家内工業という形式が成立した。その後、さらに生産規模が拡大すると、問屋は、自ら工場を建設し、そこに技術者を集めて製造に携わるようになった。製造方法としては、機械化は為されず、依然として手工業に頼っていたので、この段階を工場制手工業(マニュファクチュア)と呼ぶ。それがさらに進んで機械化がされると、工場制機械工業となる。

B どの地域でも、時代が進むにつれて、工場制機械工業が中心的な形態となっていくが、当然のことながら、それ以前の時代の形態も残っている。京都では、伝統工芸品製造の場合は当然、手工業が残っているが、それとは別に、問屋制家内工業が残っているのも、京都の産業の大きな特徴である。京都の産業として有名な西陣織の業界がその例である。

西陣織の帯地製造の会社は、もちろん自社の工場で製造することもあるが、特徴的なのは、「出機(でばた)」と呼ばれる織手に発注する点である。出機は、自宅の一角に自己が所有する織機を備えており、問屋会社から発注を受ける。その時、帯のデザインも指定され、それを織るための型紙や糸の提供を受ける。出機が製造した製品は問屋が引き取り、販売ルートに乗せる。出機は、独立の個人事業主である。出機が使用している織機は、現在では機械が多いが、高級な織物の場合は手動機械(「手機(てばた)」)が用いられている。機械織機の場合も手機の場合も、織り手の個人所有が通常である。

(注) 小林浩は先端産業と伝統の関わりについて、京都では、時代の先端を行く企業が伝統的な手工業技術に根を持っていると述べている [小林: 85]。ファインセラミックスの「京セラ」は、言うまでもなく、京都が陶磁器製造の長い伝統をもつことと関係がある。女性下着の「ワコール」は、小さい布を縫い合わせて曲面を作る足袋製造の技術を受け継いでいる。精密機械製造の「島津製作所」は、金属部品を加工する仏壇仏具制作の技術との関連があると考えられることができる。

おわりに

京都は多くの人にとって魅力のある都市であり、今まで、数え切れない数の論者が京都について論じてきた。論じ方としては、エッセー、旅行案内、文化論のようなものが多く、学術的な京都論は必ずしも多くなかった。

本稿は社会学の立場から、特に社会学が培ってきた社会学特有の概念を用いて、京都について分析を施してきた。社会学の概念は、本文で見えてきたように、社会を、今まで気づかなかったような新しい観点から見ることを可能にするようなものである点が特徴であり、本稿では、以下の諸点について、そのような分析を行ってきた。

「伝統の創造」に関しては、京都の観光名所の多くが、その要素を持っていると言える。「恥の文化」については、日本の中でも京都は典型的に恥の文化の行き渡った土地である。「境界人」については、かつては都であったが今は異なる京都の人は、時間軸上の境界人とも呼べる存在で、京都人の特徴とされる「イケズ」をも、その観点から理解することができる。

「中心と周辺」に関しては、京都は種々の意味で日本の中心であり続けている。「大衆社会」という概念に関しては、京都は現代の大都市でありながら、大衆社会的な特性が比較的薄い。「ハレとケ」の概念については、京都の観光地など、他の地域の人によく知られた京都は、多くの場合「ハレ」に属するものであると言える。「都市化」に関しては、京都は大都市ではありながら、都市化の度合いが必ずしも大きくない。「文化資本」という概念は、京都の文化のために作られた概念であると言えるぐらい、京都は文化資本に富んでいる。「文化」と「文明」の区別に関しては、京都は文化を育んだだけでなく、文明をも積極的に取り入れてきた都市である。工業の形態に関しては、京都の帯製造業界は今なお問屋制家内工業の形態を残していると言える。

参考文献

- 鯉坂学他編, 2008, 『京都の「まち」の社会学』, 世界思想社
- 鯉坂学, 2008, 「京都の伝統産業と「まち」の移り変わり」(鯉坂学他編著)
- 入江敦彦, 2005, 『イケズの構造』, 新潮社
- 江口信清, 1996, 「京風の文化イメージ」(二場邦彦他編著)
- 大淵幸治, 2000, 『丁寧なほどおそろしい「京ことば」の人間関係学』, 祥伝社
- 木津川計, 1996, 「京都の文化と文化人」(二場邦彦他編著)
- 桐浴邦夫, 2008, 「近代の茶の湯復興における茶室の安土桃山イメージ」(丸山宏他編著『近代京都研究』, 思文閣出版)
- 河野健男, 2008, 「京都と観光」(鯉坂学他編著)
- 桜井徳太郎・谷川健一・坪井洋文・宮田登・波平恵美子, 1984, 『共同討議 ハレ・ケ・ケガレ』, 青土社
- 内藤三義, 1998, 「京都らしさの構図」(佛教大学総合研究所編著)
- 中林浩, 2008, 「卓越した生活景としての京都の景観」(鯉坂学他編著)
- 二場邦彦+地域研究グループ編, 1996, 『京が甦る いま何をすべきか』, 淡交社
- 佛教大学総合研究所編, 1998, 『成熟都市の研究 京都のくらしと町』, 法律文化社
- 細辻恵子, 2008, 「京都の老舗の社会学」(鯉坂学他編著)
- 松本修, 2006(原著1993), 『全国アホ・バカ分布考』, 新潮社
- 柳田國男, 1998, 『柳田國男全集 第5巻』, 筑摩書房
- 山上徹, 2002, 『観光の京都論』, 学文社
- Benedict, R., 1946, *The Chrysanthemum and the Sword*. (長谷川松治訳, 1967, 『菊と刀 日本文化の型』, 社会思想社)
- Bourdieu, P., 1979, *La Distinction*, (石井洋二郎訳, 1990, 『ディスタンクシオン』(I・II), 藤原書店)
- Bradley, H., 1904, *The Making of English* (Revised by S.Potter,1968)(寺澤芳雄訳, 1982, 『英語発達小史』, 岩波書店)
- Burgess, E. W., 1925, "The Growth of the City", Park, R. E. et al. (eds.) *The City*, University of Chicago Press (奥田道大訳, 1978, 「都市の発展——調査計画序論」, 鈴木広編, 『都市化の社会学』増補版, 誠信書房).
- Hobsbawm, E. et al. (eds.), 1983, *The Invention of Tradition*, (前川啓治他訳, 1992, 『創られた伝統』, 紀伊國屋書店)
- Kornhauser, W., 1959, *The Politics of Mass Society*, (辻村明訳, 1961, 『大衆社会の政治』, 東京創元新社)
- Riesman, D., 1960, *The Lonely Crowd*, (加藤秀俊訳, 1964, 『孤独な群衆』, みすず書房)
- Shils, E., 1975, *Center and Periphery: Essays in Macrosociology*, University of

- Chicago Press.
- Simmel, G., 1908, *Soziologie : Untersuchungen über die Formen der Vergesellschaftung*, (居安正訳, 1994, 『社会学』(上・下), 白水社)
- Veblen, Th., 1899, *The Theory of Leisure Class*, (小原敬士訳, 1961, 『有閑階級の理論』, 岩波書店)
- Wallerstein, I., 1974, *The Modern World-system*, (川北稔訳, 1981, 『近代世界システム』(I・II), 岩波書店)
- Wirth, L., 1938, "Urbanism as a Way of Life", *American Journal of Sociology*, 44. (高橋勇悦訳, 1978, 「生活様式としてのアーバニズム」, 鈴木広編, 『都市化の社会学』増補版, 誠信書房)